

## 自己評価報告書

平成23年4月26日現在

機関番号：12601  
研究種目：基盤研究（B）  
研究期間：2008～2012  
課題番号：20320052  
研究課題名（和文）グローバル化時代における文化的アイデンティティと新たな世界文学カノンの形成  
研究課題名（英文）Cultural Identity and the Formation of a New Canon of World Literature in the Age of Globalization  
研究代表者 沼野 充義 (NUMANO MITSUYOSHI)  
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授  
研究者番号：40180690

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学 各国文学・文学論

キーワード：世界文学、翻訳、広域英語圏文学、ラテンアメリカ文学、ロシア東欧文学

## 1. 研究計画の概要

本研究は現在の世界の文学の複雑なプロセスを全体としてとらえるために、以下のような問題の解明に焦点をあてる。

(1) ヨーロッパ周辺の越境的な文学のありかた ロシア東欧の亡命文学の場合。

作家たちの越境・亡命体験や、異文化との接触が、その創作にどう影響し、また亡命作家の存在が西側の文学にどんなインパクトを与えたかについて総合的な研究を目指す。

(2) ヨーロッパ周辺の越境的な文学のありかた 広域スペイン語圏文学の場合。

ラテンアメリカ文学や北米のスペイン語文学に本質的に備わっている越境性に焦点をあて、その文学的意義と現代世界の文学に与えつつある影響を解明する。

(3) 翻訳の役割と、「世界文学」論の展開および新たなカノンの形成。翻訳と原作の関係、原作に備わる文化的アイデンティティの翻訳による変容といった側面を重視する。

## 2. 研究の進捗状況

(1) 2008年度 ロシア東欧、広域英語圏、広域スペイン語圏、亡命・越境文学など様々な分野の研究を並行して進めた。今年度重点

課題としたのは、欧米の周縁や日本も視野に入れて世界文学の現状を総合的に把握しながら、欧米中心主義的な世界文学像の再検討を試みることである。

若手研究者の積極的な参加を得て国際ワークショップ「翻訳と世界文学」や、越境・移民文学をめぐるシンポジウム「未来への郷愁」を主催したほか、日本ロシア文学会全国大会においてワークショップ「ロシア文学にとって翻訳とは何か？」を組織した。

(2) 2009年度 今年度重点課題としたのは、「グローバル化時代の越境的体験と文化的アイデンティティ」であり、具体的には、現代アメリカの作家レベッカ・ブラウン、ブラジルの映画研究者ヴィエイラ、ロシアの作家アクーニン、ベルリン在住のソ連出身作家カミーナーなどをゲストとして招き、講演会・セミナー等を開催するとともに、それぞれの作品の分析を行なった。

また7月には加藤有子の企画協力により、「シュルツ祭」というシンポジウムを行い、ポーランドのユダヤ系作家シュルツの創作と生涯を検討し、10月にはボルヘス会に協力して、ボルヘスと南北アメリカという主題を

検討した(野谷・柴田)。11月にはセルビア出身のキシユをめぐるシンポジウムを、奥彩子・山崎佳代子ら専門家の参加を得て行なった。2010年3月には海外から6名のナボコフ研究者を招いて連続講演会を行なった。

(3) 2010年度は、「グローバル化時代の世界文学の多様性と多言語性」を主要課題とした。広域英語圏については、非英語圏出身作家の英語文体の研究に重点をおき、コンラッドやナボコフ、イシグロなどの例を取り上げた。広域スペイン語圏では、キューバ、コロンビアなどのカリブ海圏の文学に重点を置き、この地域の言語と文学の多様性を研究した。ロシア東欧圏では、この地域における多民族性・多言語性に重点を置き、民族・言語・文化的アイデンティティの関係を研究した。また代表者沼野はストックホルム、韓国、モスクワなどの学会で、ロシア東欧文学とアジア・翻訳などのテーマで発表し、この分野における国際的交流を推進した。

ゲスト講師を招いての研究集会・セミナーなども積極的に開催した。うち特に重要な3つの国際シンポジウム等については、それぞれ報告集をまとめて2011年3月に刊行した(「本郷の春—ナボコフと亡命ロシア作家たちをめぐる連続講義の記録」、「ロシア文学と東アジア」、「社会制度としてのロシア文学」)。

### 3. 現在までの達成度

①当初の計画以上に進展している。

(理由) 各分野の研究分担者が旺盛な国際的活動を行なった結果、海外の研究者・作家を招いてのコンファレンス・セミナー・研究集会などを予定よりも頻繁に行い、学術交流及び個別の作家の事例研究に関して、豊かな材料を集め、検討することができたため。

### 4. 今後の研究の推進方策

これまでの3年間に収集した豊かな事例や

積み重ねた分析結果に基づいて、残りの2年間では、多分野的視点から総合分析していくことを目指す。平成23年度は「現代世界文学と翻訳」を、平成24年度は「新しい世界文学像とカノンの形成」をそれぞれ主要課題とする。そして平成25年3月に、5年間の研究の総まとめとして国際シンポジウムを開催し、その研究報告集を単行本として出版する。

### 5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計16件)

- ①加藤有子、イメージ・テキスト・書物、スラヴ研究、57号、1-25ページ、2010。
- ②柴田元幸、20世紀アメリカ小説と映画、れにくさ、2号、181-191ページ、2010。
- ③野谷文昭、現代キューバの作家たちと文化的環境、次世代人文開発センター紀要、22号、13-19ページ、2009。
- ④Mitsuyoshi Numano, *Toward a New Age of World Literature*, れにくさ、1号、pp.188-201、2009。

〔学会発表〕(計18件)

- ①沼野充義、Новая волна переводов русской литературы в Японии, 国際翻訳者会議、2010年9月3日、モスクワ・ロシア国立図書館。
- ②Ariko Kato, *Księga jako topos pisania i rysowania*, International Conference „Schulwowskie inspiracje w literaturze,” 2010年5月27日、ドロホビチ教育大学(ウクライナ)。
- ③柴田元幸、北米文学が読むボルヘス/ボルヘスが読む北米文学、ボルヘス会創立10周年記念シンポジウム、2009年10月24日、セルバンテス文化センター東京。
- ④野谷文昭、『百年の孤独』の成立過程、ガルシア=マルケス会議、2008年10月3日、セルバンテス文化センター東京。

〔図書〕(計10件)

- ①Mitsuyoshi Numano and Kyoko Numano eds, *Russian Literature and East Asia*, 2011, 41pp.
- ②Mitsuyoshi Numano eds, *Revising Nabokov Revising*, 2011, 211pp.
- ③Ariko Kato (共著), *Białe plamy w schulzologii*, 2010, pp.151-181.
- ④沼野充義(編著)、芸術は何を超えていくのか?(未来を拓く人文・社会科学15)、2009、200ページ。

〔その他〕なし